

主食摂取パターンに及ぼす家庭構造ならびに食生活意識の影響

神戸女大家政 金谷昭子 ○宮田康子

兵庫女短大 入江一恵 甲南女大家政 星野英子

<目的> 三食米飯は我が国固有の主食パターンであり、この伝統は今なお継承されている。戦後、日本をめぐる社会情勢は急速に変動し、多くの要因が相互に関連しながら日本人の生活意識に大きな変化をもたらした。食生活においても多様化、高級志向、簡便化、栄養・健康志向等様々の影響を与えるにいたっている。食生活の中心である主食パターンにもこれらの変化はあらわれ、摂取パターンのみならず摂取スタイルにも変化を生じ、米はもとよりパン、麺等の主食への導入にもバラエティがみられるようになった。今日、食糧問題は国際的にも極めて重要であり、このような主食の導入が、いかなる意識のもとに、いかなる形でなされているかについて調査・分析することは、大きな社会的意義を有すると考え、この調査を行った。

<方法> 調査対象：兵庫県下の女子大生の家庭

調査時期：1987年 秋

調査方法：主食摂取状況、家族構成、食生活意識などを調査用紙に記入

解析方法：コンピューター（FACOM-M780）を用い、SASにより解析

<結果> ①三食米飯の家庭が過半数を越え、朝食のみパンの家庭がこれに次いでいる。

麺類は、昼食に摂取されている場合が多い。

②米飯の選択はほぼ習慣によるが、パン・麺等の選択は積極的理由に基づく。

③主食の選択は概ね主婦の決定によるが、特にパンの導入には、若年女性の選択が影響を与えている。